

8502 ヨーロッパを旅行して、スナップ写真を・・・

ヨーロッパを旅行して、スナップ写真を撮った女性が、そのフィルムを現像してみると、男たちの足のどっちかが、かならず地面についていないポーズでうつっているので、首をかしげたというが、それはそうだろう。あそこの男たちはスタスタと、あたかも確信をもって、あるところへいくといった調子で歩くからである。

古波蔵保好『男の衣裳簞笥』

[許容訳例]

There was a woman who, after her travels in Europe, where she took some snapshots, had the films developed. She felt it strange when she found that every man in the photos had one foot off the ground. Personally I find it quite natural: men in Europe always stride along as if they had full confidence in where they are going.

[翻訳例]

A woman who took some snaps while traveling in Europe noticed, when the films were developed, that the men were all caught with one foot off the ground, which puzzled her----quite understandably, since men there always stride along determinedly as though they know where they are going.

■ヨーロッパを旅行して、スナップ写真を撮った女性が、そのフィルムを現像してみると、男たちの足のどっちかが、かならず地面についていないポーズでうつっているので、首をかしげたというが、それはそうだろう。(8502)

●〔して〕 → 〔してその間に〕(暫時同時)

「ヨーロッパを旅行して」の〔して〕と後に続く「スナップ写真を撮った」の関係性は〔そしてその間に〕(暫時同時)ですから while (she was) traveling in Europe ですが、同じ内容を on her travels in Europe と「句」に変えて伝えることも出来ます。

●文技巧(言葉を補う)

「スナップ写真を撮った」は took some snaps [snapshots]です。日本文には some に相当する言葉はありませんが、この some は重要です。someを入れないで she took snaps [snapshots]とすると When she went to Europe, what did she do?と質問されたときの答えといったような一般的な意味になってしまします。日本語というのはなるべく言葉を削って最小限度の表現に切り詰め、あとは読み手の考えに任せるというところがあります。つまり、日本人の読者は無意識に補って読んでいるのです。そういう日本語を英語にする場合、英語として意味のよく通る適正な文章にしようとすると、どうしても若干の言葉を補わざるを得ないです。ただ、この書き手の文章は、読者の判断にゆだねるという部分が多くて、その分だけ書き手がムードに流されていい気になっているのではないかという気

がして、少々苛立ちを覚えざるを得ません。たとえば、すぐ後に出てくる「男たちのどっちかが、かならず地面についていないポーズで・・・」などあまりにも自己流の表現のように感じられます。男たちの足のどっちかが地面についてないというのは、何も西欧人に限らず、歩く以上は日本人も同じです。その自己流がこの筆者の文章の面白さだといえばその通りかもしれません、この文章を翻訳する場合、書いてある言葉を文字通りの意味で受け取っては意味をなさないわけで、必ず別の意味合いで補足的に想像しながら読んで訳さなければならないことになります。

●「連体修飾節+不定代名詞的体言」(ヨーロッパを旅行して、スナップ写真を撮った女性)

「ヨーロッパを旅行して、スナップ写真を撮った女性」は「連体修飾節（ヨーロッパを旅行して、スナップ写真を撮った）+不定代名詞的体言（女性）」ですから、英語では「名詞(a woman)+関係詞節(who took some snaps [snapshots] while traveling [on her travels] in Europe)」となります。

★「そのフィルムを現像してみた」は、自分で「現像する」なら develop the filmsですが、ここは普通の女性でしょうから、人(she)を主語にして「現像してもらう・現像させる」なら経験受動態で had[got] the films developed であり、the films を主語にするなら the films were developed です。

★「男たちの・・・」の「男たちは」は every man でもよいし、話の流れから the men…all…でもいいと思います。

★「足のどっちかが、かならず地面についていない」は have one foot off the ground でしょう。なお、主語を every man の場合 his foot、それから the men の場合 their foot とすると、男の足は一本になってしまいます。ここは one foot です。

★「ポーズでうつっている」という日本語には「(ポーズでうつっている) のを見て・に気がついて」が隠れています。noticed[found] that (every man; the men) in the photos…で表すことが出来るし、また noticed[found] that the men were all caught (with one foot off the ground) と書くことも出来ます。この were caught は、The thief was caught red-handed. (現行犯で捕まった)とか、I caught him in the bath. (行ったとき、かれはちょうど風呂に入っていた) のように使いますが、「写真を撮られたときのポーズ」というのにもつながる表現だと思います。

★「首をかしげた」は動作の表現としては tilt one's head/ cock one's head ですが、これだけでは日本語の「首をかしげた」の意味が通じません。「首をかしげた」とは「不思議に思う・何だろうと思う・疑わしく思う」ということなので、「動作+内容を表す副詞」、たとえば、cock one's head thoughtfully とするか、あるいはその動作で表している意味を別の言葉で言い換える、たとえば、She felt it strange…とか She puzzled to find…とすると、日本語の「首をかしげた」の意味に近づけると思います。

★「・・・というが・・・」の「いう」は、訳すなら I heard ですが、この文章の日本語の調子からすると、直接聞いたか間接の伝聞であるかは別として、ある女性の体験をさりげ

なく披露するという感じで、別に I am told とか I hear とかは入れなくていいと思います。入れると英語的にはちょっと大げさな感じになるようと思われます。

★「それはそうだろう」は、I think it quite natural.でも間違いではありませんが、「自分の考えとして・・・だ」という場合には personally を使います。Personally I think it…あるいは I myself…も使えます。I myself think[feel] it…の方がいいかもしれません。なお、ここ 「それはそうだろう」は、写真に写っている男たちの足がすべて片足地面から離れてるので首をひねったという女性の反応も含めて、ヨーロッパをよく知っている者にとっては納得のいく話だという意味に解釈できるので、It was quite understandable that she should have been puzzled…、あるいはこれを日本語の長さに合うように縮めて…, which puzzled her, quite understandably とすることも可能です。

●文構造（翻訳には連結辞の知識が肝要です）

この文はいくつかの {単位情報} が「ヨーロッパを旅行 [して]、スナップ写真を撮った女性が、そのフィルムを現像して [みると]、男たちの足のどっちかが、かならず地面についてていないポーズでうつっている [ので→に気づいて]、首をかしげたという [が]、それはそうだろう。」という順序で並べられています。要するに、「A [していて]、B し [た] 女性が C [して]、D [に気づいて]、E した [が]、F(それはそうだろう。)」ということです。翻訳というのは、これを英語の固有性を尊重しながらできる限り日本語の情報順に {単位情報} 間の関係を処理するということです。{単位情報} の中身は★印の部分で示しましたが、それを [] 内の関係になるようにするにはどのような連結をすればよいかが翻訳では問われることになります。そのためには、連結辞として使われる接続詞・関係詞・準動詞のそれぞれの基本的属性を文法でつかみ、その使用方法は読んで覚えるという心がけが重要です。連結方法を意識して読めば、案外、瞬く間に覚えることが出来ます。この連結は簡単にすると、A woman [who] B [while] A, noticed, [when] C, [that] D, [which] E----F(quite understandably), [since]…です。

■あそこの男たちはスタスタと、あたかも確信をもって、あるところへいくといった調子で歩くからである。(8502)

★「あそこの男たち」は men there ですが、「あそこ」とは「ヨーロッパを旅行して・・・」ですから men in Europe でも構いません。

★「スタスタと歩く」は stride along の他に辞書には walk briskly [at a brisk trot] も出ています。

◆習慣を表す will と現在時制について

「あそこの男たちはスタスタ歩く」には「習性・習慣」が感じられるので、Men there [in Europe] always stride along…と書くことになります。ところで、辞書や文法書には「二人称・三人称主語で習慣・傾向・習性を will で表す」という項目があり、He will write for hours at a time. (一気に何時間も物を書くことがある) とか Accidents will happen. (事故は起きるものだ) というような例文と訳文が出ています。したがって、Men there [in Europe] will

stride along. としても間違いとまでは言えませんが、やはり、不自然な感じがします。ここは現在時制を使った方がいいです。will を使うとどうしても主観的なニュアンスが入ってきます。たとえば、He will go on talking for hours without letting anybody else talk. と言えば、そういう人だから困ったものだ、という感じになります。あるいは He will walk for ten hours without getting tired. でしたら、だからたいしたものだ、ということになります。

★ 「あたかも確信をもって、・・・」は as if [though] they had full confidence…ですが、「あたかも確信をもって、・・・」と句点（コンマ）を入れて切っていますから「確信をもって」は「あたかも」の外に出して determinedly as though [if]…としてもいいと思います。

★ 「あるところへいくと行った調子で」は in where they were going とか、as though they know where they are going とか as though they are going somewhere です。

◆冠詞について

上の as if [though] they had full confidence in where they are going ですが、後の in where they are going に限定されていると考えて full confidence に the を付けることは問題です。full confidence は in where they are going に限定されているわけではないです。わかりやすい例を出すい例で説明しますと。イ. Please look at the man in a red hat. と、ロ. I saw a man in a red hat. いう二つの文章では in a red hat の役割が違います。イ. の方は「(他の人は見なくてもいいから)あの赤い帽子をかぶった男の人を見てください」ということで、the man は in a hat でによって限定されています。しかしロ. の方は man in a red hat が一つのユニットになっていて、I saw a man and he happened to be wearing a red hat. ということで、in a red hat によって man は限定されているわけではないです。つまり、the government of Japan と言えば、「フランスの政府ではなく、現在の〔当時の〕日本政府」という意味になりますが、a government of Japan というと、「ある特定の日本政府ではなく今までいくつかあった日本政府のうちの一つ」という意味になります。ですから of Japan が後ろに付いているからといって必ずしも the を付けるとは限らないわけです。そして、この場合の full confidence in where they are going というのは、たとえば、music とか joy といった言葉と同じく、全部で一つの abstract idea となっていますから the を付ける必要はないわけです。

● [から]

「・・・からである」は since; because などが可能ですが、書き方によってはコロン(:)でも構いません。コロンは次に説明を加えるような場合によく使います。